風鳥

〔本朝食鑑六山禽〕風鳥

此亦蠻人貢之、狀類鳥鳳而頭黃、頰頷黑背翅及腹紫黑、脚如鼠趾、尾上紫下黃、紛披如荑穗之亂風、國人謂不棲林木而棲巖洞、常不能飛、有風則飛舞、無常食而向風開口如食、其怪奇不可言、或曰、此蠻人飾鳥毛之麗者、新巧造作鳥形、以譎本邦之人、其然乎、

〔重修本草綱目啓蒙三十三林禽〕練鵲　風鳥○中略

風鳥ニ大小二種アリ、此ハ小ノ風鳥ナリ、形ツムギヨリ小ク、背ヨリ尾マデ紫褐色ニシテ、腹ハ色淺シ、觜脚共ニ黑色ナリ、兩脇ヨリ尾上マデ長キ羽毛アリ、兩脇ニテ長サ三四寸、漸ク長クシテ、尾上ニテハ長サ一尺許、コノ羽毛白色甚薄ク、柔細ニシテ透徹ス、コノ羽毛ニテ尾ハ見ヘズ、是拖白練ナリ、又拖赤練紺練雀アルコト、浙江通志ニ出、皆尾上ノ羽毛ノ色ニ因テ名ヲ命ズルナリ、

〔飼鳥必用中〕風鳥

此鳥總羽白シ、此鳥地に下らず、空に飛行して風を喰候よし、觜足は黑シ、和の小鷺程有り、雙羽先きに針がねのよふなるもの有る、空にて羽をつかふ時は、其針がねにて掛合の鳥のよし世に云傳へあり、往昔出雲の國にて、右針がねの羽の付たるを、空より落たると云人あり、先年長崎にて服部氏所持の干かためたるを見たり、又東都護國寺の開帳に、寺の法物なりとて被爲見し事有り、未活鳥を不見、鷺の身拔のごとし、此鳥出たる元を不知、至て尾のふつさりとしたる鳥也、

雷鳥

〔夫木和歌抄二十山〕正治二年百首御歌　後鳥羽院御製

しら山の松の木蔭にかくろへてやすらにすめるらいのとりかな

〔輶軒小錄〕越山鵜之事

越の白山にらいの鳥と云ふ物ありと、昔より語り傳ふ、其字鵜の字を書く、朱冠玄衣、青腹白翅のさきに白色を帶び鵲の如し、雌は雌雄の如し、甚其子を愛す、白山は北國にては究めて高山なる